

御移転百年に寄せて

著者	木村 清孝
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	16
ページ	3-7
発行年	2011-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000384



御移転百年に寄せて

鶴見大学仏教文化研究所所長 木村 清孝

現在、本学の学長を務め、本研究所の所長も兼務めさせていただいております木村でございます。本日は大変暑くなりましたが、その中を、多くの皆さんにお集まりいただきまして、ほんとうにありがとうございます。ただいま会を務めてくださいます矢島先生からご紹介がございましたように、大本山總持寺の横浜ご移転から明年がちょうど百年になります。このことを記念いたしまして、三年連続で関連する公開シンポジウムを進めさせていただいている次第です。

昨年は少し専門的な、非常に綿密な研究に基づく研究発表とシンポジウムを行なわせていただきました。今回はもう少し広く、ご本山を取り巻く状況、つまり、どういう歴史の中でご本山が成立し、どういう文化を育みながら歩んできたのかということ、その御移転の前後を中心に考察を進めるということで、この大会を開かせていただきました。

お手元の「資料集」の中で少し触れさせていただいておりますし、私も後にシンポジウムの中でまた発言させていただきます。ただきまされども、この時間を頂戴して、「總持寺の歴史と文化」という問題の原点ともいえる、總持寺を開かれました太祖瑩山紹瑾禪師の禅の世界について、少し前提的にお話をさせていただきます。時間もございませので、大まかな話になりますが、ご諒承いただきたいと思います。

曹洞宗では、ご承知の通り、永平寺と總持寺を両本山とし、ご本尊として、それぞれのご開山でございます高祖道元禪師と太祖瑩山禪師をお釈迦様の両脇に配し、三尊としてお祀りするというのが原則となっております。

では、瑩山禪師の禪の世界は、どのようなものなのでしょうか。私は、とくに次のようなところに着目すべきではないかと考えております。

その第一は、私どもが受け継いできております仏教を大乘仏教と申しますけれども、その大乘仏教の基本的な立場を禪師は大変深く理解され、それを実践へと結び付けていらつしやるということです。大乘仏教と申しましても、実はいろいろな流れがございます。その中で、東アジアに伝わりました仏教の主流は、如来蔵思想、あるいは仏性思想と呼ばれる系統です。分かりやすく申しますと、私どもと仏とが本質的に一つである。必ず私たちは、だれもが仏になれる。——そういう深い確信に基づく思想です。禪師は、この思想の流れをしっかりと受け止め、独自の形で宣揚していらつしやるのではないかと、いうことでございます。

第二点は、そうした大乘の立場を受け継ぎ広めていく上でも重要な「清規しんぎ」に関する認識と実践の問題です。清規とは、禪宗における戒律と、行持、つまり日常の生活の仕方に関わる決まりと儀礼を合あわせたような性格のものですが、この清規が極めて重要であることを禪師は深く認識されてきました。一般的に「瑩山清規」と言われているのがそれで、さまざまな清規の中でもひととき具体的な記述されており、毎日どんなことをしたらいいのか、月別にどういう行事があって、どのようにしなければいけないのか、さらに年間行事としてどういうことがなされるのか、といったことが詳細に論じられています。ここに記される通りの行持をお弟子さんたちとご一緒に実行しておられたのでしょうか。具体性、現実性をしっかりと具えた、この清規の認識というものが、禪師の仏教の大きな特徴の一つではないかと思うのです。

仏教が中国に伝わり、本格的に仏教教団が成立し、その規範ができてまいりますのは、五世紀の中国・南北朝時代

の初期に道安法師が出られてからです。この道安法師のことを、『法華経』や『阿弥陀経』などを翻訳されたことで広く知られている大翻訳家の鳩摩羅什法師は、「東方の聖人」と呼んで敬つたと伝えられています。日本の禅宗において、具体性を持った形で清規を明示されたのが瑩山禪師でございますから、禪師はその道安法師とも比肩し得る側面を持つていらつしやると私は考えております。

第三には、従来から言われてきていることでございますが、瑩山禪師は一生のうちは何度か深い宗教体験を重ねられ、それと密接に関わる形で誓願を立てておられます。その誓願の中で、私は、とくに二十五歳の時に立てられたと言われます。「大悲闡提」の願が際立って重要であると思います。「大悲」とは、大いなるあわれみの心のこと、闡提とは、一般的には、正しい信心をもてず、仏になれないとされる衆生のことです。ところが、『楞伽経』というお経には、衆生に対するあわれみの心から、あえて自ら仏にならず、衆生とともにあろうと誓う菩薩が出てきます。これが「大悲闡提」、あるいは「菩薩闡提」と呼ばれる存在です。瑩山禪師は、まさしくこのような菩薩の在り方を自らの生き方としようと誓われたということだろうと思います。

さらに禪師は、晩年に至つて、二つの誓願を新たに立てられています。そのうちの一つは「常発心」、つまり、常に発心し続ける、何度も何度も新たに発心する、ということことです。「発心」とは発菩提心、真実の悟りに向かおうとの決意のことです。禪師は、死を間近に感じ取りつつ、日々、この決意を新たにされたのでしょうか。もう一つは「女人救済」の誓願、つまり女性を救い続けようとの願いです。これも、当時の女性たちが置かれていた状況がきわめて厳しく辛いものであったことを考えると、まことに重要な誓願であると思います。ここにも現実をしっかりと見て、いま何が大事か、どうしたらいいのかという、現実重視の大乗仏教者としての思いが表れているのではないのでしょうか。しかも、これらの誓願は、単にこの世に生きている間にこうしましようというのではなく、未来永劫につながるものであつたでしょう。こういう在り方を読み取ることが、瑩山禪師の禅の世界を理解する上では大変大事ななこと

であろうと思います。

もう一つ、上記の「女人救済」の誓願とも密接に関連することですが、檀信徒、すなわち、自分を信じ、帰依し、布施をしてくれる在家の人々を禪師は大変大切にしておられます。高祖道元禪師の場合は、とくに永平寺に入られた後は、一人でも半人でも本物の仏教者を育てようという思いを中心に過ごされています。この点では、両祖の間には対照的な一面もあるといえましょう。

以上、瑩山禪師の禅の世界を考える時にとくに大事だと思われるいくつかのポイントをご紹介しました。それは、全体的には、いわば「ハイレベルな在家主義仏教」として捉えることができると思います。そして、現代においてこそ、この瑩山禪師の理念を生かしていくことが求められているとも思うのです。

日本の仏教は、伝来以来、全体的に在家主義的な志向が大変強いのです。これには、社会構造の問題、日本の伝統文化の問題等、さまざまなことが関わっているわけですが、瑩山禪師の禅というのは、この流れに即応しつつ、出家在家の枠組みを超えて広められる可能性をもっていると思います。

例えば、坐禅そのものに関しても、道元禪師の坐禅は、「只管打座」という言葉に象徴されますように、いわば純粹な智慧の坐禅として性格づけられます。対して、瑩山禪師の坐禅は、『坐禅用心記』にありますように、大悲の坐禅です。智慧と慈悲は大乗仏教の両輪で、どちらが上ということはありませんが、後者に重点を置いた形の坐禅を瑩山禪師は宣揚していらっしやるわけです。

最後に、さきほど申し上げました「大悲闡提」の誓願について、少し補足させていただきます。この誓願は、まさしく行動の仏教を志向するものです。例えば、中国の隋・唐の時代に、三階教という新仏教が興りました。やがて弾圧されて、宋代にはほぼ姿を消してしまいましたが、この三階教の人々は、「闡提のための仏教」を自負しています。かれらは、末法の時代の邪見を事とする人間、どうしようもない社会を何とかしたい。皆が救われるためには、誰も

が自らの悪を認めるとともに、すべての衆生に手を合わせるという実践以外にはない、と主張して、一時は爆発的に教えを広めました。瑩山禪師の「大悲闡提」の誓願とそれに根ざす実践には、この三階教とも通ずるところがあると思ふのです。

現代は、もちろん、瑩山禪師の時代とは大きく異なります。ですから、当然、慈悲の具体的なありようも違ってきます。けれども、根本的には、それは正しい修行の中で得られてくる縁起の自覚に基づいて自然に出てくるものでしょうし、禪師の大悲闡提の誓願につながるものでしょう。ともあれ、瑩山禪師の禪の世界を学ぶことを通じて、私たちは、自らがなすべきことについて、さまざまな深い示唆をいただくことができるのです。

これからお二人の先生にそれぞれお話をいただくわけですが、このような太祖瑩山禪師の禪の世界の性格を頭に入れた、それが歴史の中でどういう形で現れ、あるいはそこから離れてきているのか、そのあたりも一つの観点としてもちながら、お聞きいただければありがたいと思います。

私のご挨拶を兼ねてのお話をこれで終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。